KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
549

宮城県図書館蔵書

東行之日記

碌々齋 李芳記之

名所佳境の勝るを一つとるハ只其時眼を歓しむ
而已なるのみ故年を経て或ハ春雨乃はるかく秋の
松ハ霞愛なるを知るハ出ハ今ハ其所よりも
心地ゝ生る事も常より遠ハ移を好ハ世の業の
繁きよりハ生ゝ閑を切屋敷出る事を厭ふ
去ゝ安永八乙亥年中秋東武より下るき雨
用ありて旅の用意をなすよ伝聞親族乃
許よりゆきく脇元ハ伝る中より殊外ハ事ハ
同姓の家族にて年老ていとゝ難ゝをいとゝ

中村俊定文庫

且志の頭巾一ツ送りて[illegible]の帰国を待て餞
乃句を申ふ

[illegible]人の志乃歌
[illegible]　　蹄林庵　青魚

[illegible]や月乃的いそ帰る

[illegible]　　佳亮

[illegible]　　仝

[illegible]　　梅園

八月十日小雨又送りの人々八末明[illegible]集り
[illegible]の山川[illegible]を[illegible]云ひ[illegible]有ひ八素名

芝井の海上大井富士川の渡り慎く[illegible]
[illegible]次[illegible]を餞[illegible]も有[illegible]も初旅の書[illegible]
只伊勢[illegible]
[illegible]の八[illegible]
我[illegible]八[illegible]
[illegible]
人を八案中[illegible]送り帰り[illegible]八[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

男山の下を通りて八幡宮を遥拝して京武の
往来を眺めつゝ辻堂の白を見て出る
射ゝ戻る願や月出て弓八幡
十二日八伏見より大亀谷山科を郷ゝ過ぬ
大津より出る見ゝ湖水の景色よ早蕨心八定て
山ひゝ刈刈吹越ぬ　秋の風
十三日石部を通り水口の絵屏の峠を下る坂の下
より国の界より古法眼の筆絵山とゝ有
亜の具とゝ絵ゝを以書あ絵
関を貢の絵屏の国とゝ宿より京宮道有よ

物を直ゝ八京道より軒端より富士出ゝ旅宿を
呼ゝる事を喧しゝ
色鳥や軒端ゝ乃秋出来
十四日庄野と夜深より立ゝ石薬師東宮
杖突坂を下る今朝雨降ゝ雨降を勿ゝ芭
蕉翁ゝ句有ゝ八歩行ゝ
杖を稽て下る日和や雨出来
追分より内外の御宮をおしゝ参り市来
名を御ゝ松ゝ尾張の宮ゝ
十五日宮を出る伊勢深宵月夜宿乃里

松風乃里なる所多し池鯉鮒を西へ五丁乃道より
八ツ橋乃跡あり
かゝる衣をきつゝなれにしつまを
矢作乃橋を渡りて岡崎藤川赤坂御油に宿より
松並木にて能蔭なるもの多し
松ノ木ゝ尾花ちりて蔦紅葉
今宵は名ゆゑ知らぬ一夜の枕女郎
月前より糸桜を見れば月夜也
原宿 鳴海白さを見れば月夜也
十六丁吉田白須賀より湖に坂をくだる坂の上り

遠州七十五里北湖に入る海を南に八山をへて漫
々蒼波青天を映る行る船ハ一葉の浮るがごとし
遠ゝ見 七十五里や蔦の柳
高師山高砂乃後後名物仕出なり荒井御関所
前より船にて今切を渡る船中より湖水の眺め本
坂乃山並中の山ゝのこゝ多景なり舞坂より
浜名の城下を宿
十七日天龍川を渡る左に秋葉山遠より伊勢田の
里八橋谷の四位多里より近江わらく見附の宿より岩
見附宿八宿吉を初くこゝる処之名り景わらく見ゆ

是より袋井掛川を経て日坂より左夜乃中山へ
登る左の山より樹木の茂り青苔無間の陰如寺なり
菊川の里より山道なり坂を下りて大井川水音
川越や鍵あるなし川渡り鳥
川を渡りて駿州島田宿川の中央殺生禁断也
十八日島田より藤枝の方へ東海道富士と乃ち国境の
宿八幡風雅なり新酒より解と称して宇都の山と唱ふ
過ぎる年友人霞南子と附合の句よりして宇都の山と
酬酢漉と云句ありし句を初めとして興あり
新酒のこゝ迄乃ち山を碓とうたふ山乃山

蔦の細道に行きて彩すれば山茶花乃宿より七里
宗長の蒼波有り紫蘆と云蕉翁梅の菜乃匂ひ尾花
乃中と云ふ宿と称し汁の名物也市と称し汁と云ふ
夏なり秋を知りと云ふ
と称しなき茶屋に新茶を秋淋
安部川を渡りて府中と称今宵江尾に宿せば宿三保
乃玉原に程近
雪ふりて寒さぬやや三保の松乃音
十九日相澤を出て真清見浦見浮月を楽して行
浪よ聚て月を清見や清見浦

東宮殿塩山を望る南より三保の松原伊豆路山く遥に見ゆ
服下親子民子たちと云巖石より流の打寄るかき
潮汲女ひろハ釣舟の波間に浮ぶ家色粉京一帆の中に
見るゝ由井浦原ハ都て山迫田多き浦と云岩間に多く
て富士川と流る水上を甲州より出る富士の水也川へ
落早川にて流るゝ所あり吉原より原を富士見る
四面にて好景絶勝なるかに
天地の一景重なりや雪ぬ富士
東海道名所都て山川徒地多しと雖毎わけくに
一景を絶奇なるしかも今ハ百里

乃行程は杖を曳くかのごとく紀造化天工の佳境は筆
墨を絶し難し生涯の幸とも足言山海色原弓
廿日三島明神大社美景目を驚ろかす平地
坂よりかる大山雨坂小田原坂富士見平等く雖雨を過て
箱根より湯本迄水足深し路京也下坂雨はあれて雲
旁恐尺余ばかりなる所より助ゝ迄くるゝ桐油
ゆゝく雨合羽を着る
猶元ゝ雲介於義や茅ぬ谷
畑川端を宮旁乃平る過て湯本より雨ゝ降ル

早雲寺曹我堂を拝し奉る雨一二滴
小田原よりくるまの
廿一日小田原を出る小雨大磯駅を過ぎ西行の木像
秋書亭と云る安房国例の虎御前の堂も有り西行の
一首を思ひの秋京をうつす今之言葉を聞ん
はるかなる又帰りうの涙の袋一つれ
平塚宿を降り藤沢を下て戸塚に宿る
廿二日程ヶ谷を御ヶ加奈川より乗る品川より加奈川宿と
いふる蕎麦有りて奈良茶飯名物と東海道
なて女郎の沖なる安房上総の山を伸

初汐や品川の舟より漕ぐ安房上総
川崎六郷川を渡る品川より三里縄芝を過て
八月廿二日薄暮芝分場所勝部氏の宅に宿る
見る人富士や遠し秋の空
帰途帰金の金を拾ふ
東武の繁栄目を驚かしめ
武蔵野や雲の涯ふ十方暮
永岳寺浅野内匠頭の墓に詣る
忠臣の其名を残す蔦の葉
京都吉原郭中に泊ふ

ゆふ露の葉末や三ッ蒲登
此詠ハ各所なからなかく

集り連る北斗の前に旅人の秋
眉充の主美酒を鑑の結を係くて
予か旅情を慰めに鑑ハ赤松の佳名なる
家々とふ主の日如鑑ハ文
桜井之に贈る

秋なれや飽迄鑑乃雲味この那
上野之分中ハ花の名ありしや萬秋
乃楷そく

浅草乃鐘も隣し秋の空
九月十三夜於雨華楼子規を稲女
なる者の河原節乃一曲にて採して
東叡の詠をしておもむき興し侍りて

炎きへや山もれ水とはふ流乃月
是ハ炎きへと云ふ一曲有酔中の戯なり

立別
九月十八日東武出立諸君等尽門ま
送りなと陽関の一曲を別盃押ま
盃中半にて諸君等と手を分り

揺り分れ名残もよく寒き磯なる
九月廿八日　内外の御宮へ賽して

月さへも光を照らす家の宝居哉
十月四日　帰舎

ゆふ神の留守とかつや旅戻り

[illegible]

富士見ぬ一樽添へ新酒哉　婦国舎　眉充

扇別

立別れ吹き寄せ嵩の綿　一扇

[illegible]

通夜の小雨ふる中に三世の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

丁子の香ゆかしや紅綿　捨翠楊　獅洞

安永八亥年　小春

西宮　勝部李芳誌